

不登校児童生徒への対応事例5（中学校第1学年男子）

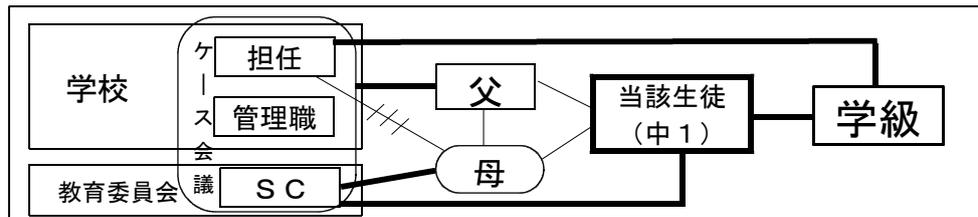
～校内体制の充実、SCとの連携～

問題の把握

当該生徒は、中学校入学後は欠席がほとんどなかったが、夏休み明けから不登校となった。母親は学校の対応に不満をもっており、担任は当人に会えない状態が続いていた。

学校は、当該生徒の友人関係には問題が生じていないことから、不登校になった原因を把握できず、具体的な対策をとることができない状態となった。

対応状況



9月
アセスメント

- 当該生徒は、両親と4人家族である。父親は当該生徒の状態を心配して、担任、管理職等に相談をしていた。
- 母親は、生徒の状況にストレスを感じて体調を崩し、現在は休職している。
- 当該生徒は、自分が不登校になったことで母親が体調を崩したことについて責任を感じている様子が見られる。生活リズムも夏休みから乱れたままであり、昼夜逆転の生活が続いている。

9月～12月
ケース会議

- 学校は、校内ケース会議を組織し、9月から12月末までに5回開催した。（構成員：校長、教頭、SC、生徒指導主事、生徒指導部員、学年主任、学級担任、養護教諭等9名）
- SCは、5回開催したケース会議のうち、4回の会議に出席し、当該生徒について共通理解を図るとともに、それぞれの役割を明確にして、不登校の解消に向けた全校体制づくりを行った。
- SCは、管理職、生徒指導主事と共に保護者との面談を4回行い、本人の変容を促すための具体的な方策を協議した。
- SCは、当該生徒と面談を4回行い、本人の不安や悩みを受け止めるとともに、不安を解消するための取組、家庭での生活についてアドバイスを行った。

1月～3月
継続的な本人・
家庭への支援

- 管理職とSCは、保護者の悩みを受け止めることができるよう、連携を図り、特に、母親との話し合いの機会を多くもった。
- 学級担任は、学級の生徒に対して、当該生徒が登校する際に不安を抱くことがないように、状況を説明するとともに、受け入れに際して学級ができることについて考え、実行する取組を進めた。
- 当該生徒の所属する学年団の教師や生徒指導主事は、学習に関する不安感を払拭するために、交代で家庭訪問を行い、継続的な支援を実施した。また、養護教諭は、生活リズムを整えるために運動の仕方や食事についてアドバイスを行った。当該生徒は、3月から登校できるようになった。

不登校の問題を速やかに解消するためのポイント

- ・学校は、不登校生徒に対応する組織及び体制を整備するとともに、生徒の自立や学習面の不安を解消する取組を継続的に実施する。
- ・学校と関係機関（SC）は、役割分担を明確にしながらか支援を行い、情報共有を確実に行う。
- ・学校は、教育委員会と連携を図り、家庭の状況を適切に把握するとともに、改善に向けて組織的に対応する体制を構築する。